

## スウェーデンの保育

### ——就学前学校における教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動——

講演：ウェンドラー・由紀子 (Yukiko Wendler)

コーディネーター：山本理絵

2015年7月3日に本学でスウェーデンの保育について愛知県立大学公開授業として講演会を実施した。その内容を以下にまとめ、紹介する。

#### 1. 教育ドキュメンテーション (Pedagogisk dokumentation) とは何か？

スウェーデンでは就学前学校 (Förskola) は教育カリキュラムと言って、国が決めた教育方針に従って活動をしていかなければいけません。以前は、就学前学校は保育園と呼ばれ、保育園の管轄は社会省でしたが、やがて保育園という名前が就学前学校となり 1998 年に管轄が教育省に移り、1998 年に教育カリキュラム、(läroplan för förskolan) ができました。その後、2010 年の改定で、教育ドキュメンテーションを使って教育活動を行うことが新たに加えられました。教育ドキュメンテーションは、スウェーデン語でペダゴギスク ドキュメンテーション (Pedagogisk dokumentation) といいます。

スウェーデンの現在の教育ドキュメンテーションの位置づけですが、教育ドキュメンテーションは全ての就学前学校に完璧に取り入れられているわけではないことを知っていただきたいと思います。その理由として、教育カリキュラムを使用することが改定されて (2010 年) からまだ間もないために、2010 年以前に大学を卒業された 40～60 代の就学前学校教師 (förskolllärare) のほとんどが、教育ドキュメンテーションを大学で学んでいません。そのため、教育ドキュメンテーション

に不慣れな方が多いと思います。就学前学校教師の中には、従来の古い方法に慣れているために、やりにくさを感じ、教育ドキュメンテーションをやりたがらない人がたくさんいます。また就学前学校教師が不足しているため就学前学校に就学前教師がほとんどおらず、就学前学校に適した教育を受けていない保育者がたくさんいることで、教育ドキュメンテーションが全く使われていない保育園が多々あることもスウェーデンの現状でもあります。また教育ドキュメンテーションは理解するまでに時間がかかり、保育者の能力や知識にばらつきがあると実効が難しいというのも理由の一つです。このような理由で、現在スウェーデンでは、教育ドキュメンテーションを取り入れている就学前学校と取り入れていない就学前学校が混在しているのです。

教育ドキュメンテーションを取り入れる目的は、大きくわけて3つに分けられます。まず第一に保育者個人、または保育者チームが教育活動を見直し改善するためです。教育活動をするための教育材料がきちんと整っているか、偏った教育をしていないか、子どもに対して民主主義による体制を整えているかなど、客観的な目で見えるために必要としています。そして第二に子どもの意見を聞くためのものでもあります。一緒に子どもと同じドキュメンテーションを見て子どもが何を考

えているか知るためのものです。そして最後に保護者への情報提供そして保護者からの意見を取り入れる道具としても目的を果たします。

ここで、ドキュメンテーションと教育ドキュメンテーションの違いについて説明します。ドキュメンテーションというのは、ビデオ、子どもの絵や製作したもの、写真、あとは子どもの会話を聞いたり、子どもが遊んでいる様子を見たりしたもの、そういうもの全てをいいます。

このドキュメンテーションをもとにして、保育者・先生同士が、あの子は何を思っているのかなとか、何を考えてこの子はこれをやっているんだろうとか子どもの興味、関心を探るために活用します。ドキュメンテーションを目の前にして子どもと、そして同僚同士で話し合うその瞬間に教育ドキュメンテーションとなるのです。

つまり、写真やビデオを撮っただけではただのドキュメンテーションでありそれらを囲んで話し合いをした瞬間に教育ドキュメンテーションとなるのです。

## 2. 知識とは？

日本の教育は、例えば、 $1+1=2$ のように学校で習うものが知識・教育と考える傾向があります。それは知識の一部に過ぎません。スウェーデンの知識・教育の捉え方は、アリストテレスが考えたように、知識が3つに分かれていると考えています (Fig. 1)。

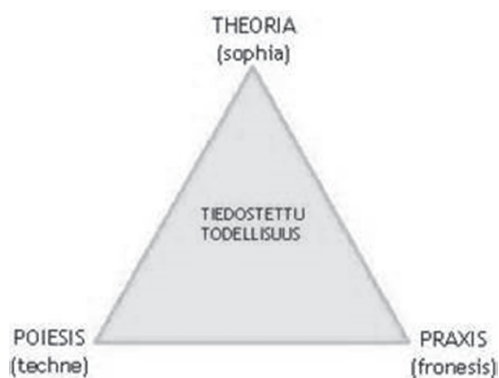


Figure 1

一つは、日本でいう知識ソフィア (Sofia)。科学とか算数とか、要するに学校で習う知識(理論)。

二つめは、技術テクネ (Techne)、手作業のための知識。陶器をつるとか椅子をつるとか、そのための知識(技術)がないとできない。それも知識の一つです。

三つめはフロネシス (Fronesis) という一番大事な、文字では表せない熟練された経験者だけが持っている知識(倫理知識)。例えば子どもを寝かしつけるときに、この子どもにはこの寝かせ方がいいんだよとか、このお母さんにはこういう話をしないと怒られちゃうからこういう話し方をしようとか、言葉にすることができないけれど何かわかる知識みたいなものを全部フロネシスといいます。スウェーデンの就学前学校の知識はここが一番大切と考えられています。そして、理論(数学、化学など)、技術(大工、手作業など)、そして、それらを社会でどのように使いこなしていくかという倫理知識を含めた三つの種類の知識を教育するのがスウェーデン教育です。これら三つの知識は、先生が子どもに教えるという方法だけでは網羅できないので、教育ドキュメンテーションを使って、これらを潤すような教育を行います。

先程も言いましたが、知識というのは大人が与えるものではなくて、子どもと一緒につくっていくものです。何故かという、今の私たちが知っている知識というのは、必ず変わっていくものだと考えるからです。例えば、15世紀までは地球の周りを太陽や月や星が回っていると信じられていました。その時代は、地球は宇宙の中心であるという知識(理論)として疑いようのないものと考えられていましたが、今では地球が太陽の周りをまわっていることが通説です。テントウムシをとっても、テントウムシは何を食べているかなど、そういうものも知識ですが、子ども同士がテントウムシについて話していることというのは、子どもたちのテントウムシについての知識になります。知識は必ず人または環境との関わり合いの中で変わります。そのたびに一つの共通の知識が作られていくので、知識は普遍的ではありません。

そのため、教育ドキュメンテーションでは、子ども同士で話している言葉を記録することがとても大事だと考えられています。このように、子どもたちの興味を探るために教育ドキュメンテーションを使っています。では皆さん、このドキュメンテーション（Fig. 2）を見たときに、どのような知識が発達しているかわかりますか。「では、今から教育ドキュメンテーションをやりましょう」となったときに、皆さんはどんな話をしますか。Fig. 2 から、何を見つけられますか。この子どもは何に興味をもち、このようなことをしたのでしょうか。



Figure 2

私は、Fig. 2 を最初見たときに、何でこんなふうにやっているのかなと思いました。よく見ると、1本黒いペンがあって、紙の右端に1と書いてありますね。その横にオレンジのペンが2本あり1の横に2と書かれている。数字とペンの数が全部合っています。7はこの子はすごく難しかったと思うんですね。数字の7ってどう書くのか、自分なりに頑張ってやった痕跡を見たときに、この子どもは数字を書くことに興味があるんじゃないか、それとも大人がいろいろ記録をしていることをまねして記録しているのでは？ と想像しました。では、この子どもが7という数字を書けるようになるにはどうしたらいいんでしょう。このように、子どもの興味や関心、今後の活動の展開

について保育者同士で話し合うために活用するのが教育ドキュメンテーションです。Fig. 2 の子どもに対して使っている教育ドキュメンテーションは、ほかの子どもと一緒に学ぶことができるので、どのようにして7という数字に興味を持たせて教えていけるかを考えることによって他の子どもの数学の発達にも影響を与えることができるのです。

このように、教育ドキュメンテーションとは、教育活動を見直し評価することによって、どのように子どもたちの興味に合わせて教育活動（知識変化）をしていけるかを考えるための道具です。

ドキュメンテーションと教育ドキュメンテーションの違いはもうわかって頂けたと思いますが、ドキュメンテーションはプロジェクトなどについて話し合い、これからどうやってクラス全体で進めていくかを決めるために使われることが多いのですが、一人ひとりの子どもの成長を見るという個別の成長記録としても使われます。

### 3. 教育ドキュメンテーションを使った活動の例（ミミズプロジェクト）

今からアンナの例を挙げて、就学前学校でどのように教育ドキュメンテーションを使って活動を行っているか説明したいと思います。

ある日、アンナが子どもたちを連れて森に行きました。子どもたちはアスファルトの上にたくさんミミズが出ていたのを見つけて、「何でこんなにいっぱいいるんだろう」と興味を持ったことにアンナが気がつきます。スウェーデンの子どもたちはミミズが大好きなので、バケツにいっぱい持って帰ってきました。アンナはそのミミズを1匹ずつシャーレに入れて、子どもたちに研究させました（Fig. 3）。

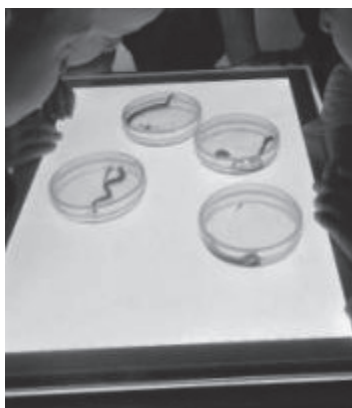


Figure 3

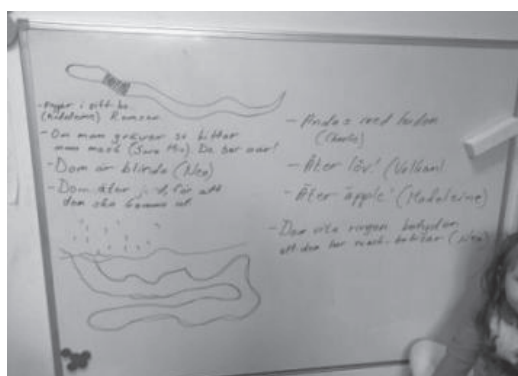


Figure 4

そして、そのときに彼女は写真を撮ったり、ビデオテープに撮ったりして、子どもたちが何を言っているのか観察しました。そのとき、子ども同士で、「何で雨の日にはたくさんミミズが出てくるのだろう」、「(ミミズを) どうやってかいたらいいだろう」、「(ミミズは) どういうふうになっているのだろう」と話しているのを聞きました。アンナは、もしかして、子どもたちはミミズに関して調べたいのかなと思ったので、次の日にミミズの話をして、子どもたちがどんなことを知っているのか書き出しました。

1人の子どもが、ミミズについてとてもよく知っていて、ミミズはいつも土の中にいるけれど、雨が降ってくると、土の中が水浸しになって溺れてしまうので地面に出てくる。だから、アスファルトにたくさんミミズがいたのではないかと話し

てくれました。このように、子どもと会話することによって、保育者も子どもたちも学びます。従来の教育だったら、先生がその日は残業して、事典で調べて、次の日に、こうだからこうですよって教えていたと思うのですが、教育ドキュメンテーションを使うと、保育者も子ども同士もお互いに学べますね。

それから3、4日後に、アンナは子どもたちに、ミミズはどんな姿をしているのか、何を食べているのだろうとか、どこで呼吸しているんだろうという質問をしました。彼女は答えを知っているので、それを教えるのは簡単ですが、子どもに興味を持たせるのが保育者の仕事と考えていますから、子どもたちに考えさせます。彼らが、ベタベタしているとか、ヌルヌルしているとか、土とかリングを食べているんじゃないかとか、肌で呼吸するのかと言ったことなどを全部ホワイトボードに書いていきます (Fig. 5)。



Figure 5

話し合いの後で、ある子どもはミミズを描くことに興味を持ったので、この子どもはミミズの絵を描きました (Fig. 6)。



Figure 6





Figure 7

この子どもは、ミミズは1本の線じゃなくて、分かれている部分に気づきました（右図）。



Figure 8

この子どもはホワイトボードに書くのが嫌なので紙に描いていますね（Fig. 9）。



Figure 9

みんな同じことをするのではなく、みんなそれぞれ自分が興味を持った材料で、興味を持ったところだけを学んでいきます。

どのようにミミズについて学ぶかは、それぞれの子どもに合ったやりかた（描く、書く、創るなど）を提供することによって知識を得ていきます。

そして、今度は学んだものを発表します。この

ように森の中でもできますし（Fig. 10）、普通の机でサムリング（日本語でいうと円陣）なんかでもできます（Fig. 11）。子どもが興味を持ったときに、このように出して話し合っ、これをまた書いて、話し合っもっと発達させていきます。その話し合ったものをまとめて、最終的に保護者に公開します（Fig. 12）。保護者が子どもたちの学びを見る機会を作ることによって、子ども達は引き続き家庭でも保護者と一緒に知識を広めることができます。

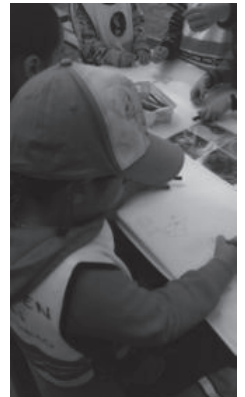


Figure 10



Figure 11



Figure 12

このように、子どもが知識を得るのは、教えるのではなくて自分の力、そして子ども同士や大人の対話によって、自分で知識を調べることになります。教育ドキュメンテーションの一番大切なポイントは、子どもが自分の力または他人の協力によって正しい知識を得る手助けを、ドキュメンテーションを使うことによってできるという点です。その子どもの学びを手助けする道具が教育ドキュメンテーションです。

ここまで何か質問はありますか。

Q. 例に挙げられた子どもたちは何歳ですか。

A. 3歳から5歳です。3歳から5歳の一つのグループでミミズのプロジェクトをしています。

Q. クラス全体は何人ぐらいですか。

A. 17人です。

Q. 活動するときは、グループごとですか。

A. ミミズのプロジェクトの時はクラス全員に話しましたが、興味がないなど全員揃わないときもあります。毎回必ず17人全員でやっているわけではなくて、ドキュメンテーションによっては、小さいグループに分けて別々に取り組み、発表するときは全員で行ったりします。

Q. ミミズを発見してから発表までどのぐらいの日にちがかりましたか。

A. 知識というのは、終わりがありません。だから、子どもに興味がある限り、そこに発達の可能性がある限り行きます。この場合は、10カ月ですね。何年もかけてやるときもあります。子どもが興味を示さなくなったら終わりにしているのです、短いときはほんの1カ月もなかったりとか、ひどいときはその日に終わったりとかもあります。その時は勢いよくプロジェクトを捨てていかないといけません。子どもの興味がなくては全く意味がないので、そのときは「これはやめましょう」ということを職員会議で話します。けれども、子どもの興味がなくなっても、とりあえず、保護者のために壁に展示します。

私の働いている就学前学校では、子どもが身体に興味を持ち始め、手が二つあるとか、足が二本

あるとか、目は見るものになるとか、いろいろ身体について話していたので、身体に関するコメントをいっぱい書いて、一つの身体にしていきました。5歳児は卒園なので、就学前学校の集大成として身体の博物館のような所に子どもたちを連れていき、プロジェクトを終えたこともありました。プロジェクトの期間や終わり方は特に決まっていません。私のプロジェクトしたものも3年越しに取り組んでいて、未だに終わらないものもあります。

#### 4. プロジェクト活動 (Temaarbete)

次は、プロジェクト活動についてです。

プロジェクト活動には、①保育者たちが立てた計画を実行するもの (vuxenstyrda)、②保育者が立てた計画から子どもたちと一緒に作っていくもの (blandat)、③子どもの興味からプロジェクトを立てるもの (barnstyrda) の3通りあると考えました。

例えば、私の就学前学校の例です。①の保育者で立てた計画を実行するというプロジェクト活動を行ったものです。プロジェクト活動は、スウェーデン語でヤーゲット (Jaget) 自分というテーマです。自分とは何か？ 誰なのか？ など自分との出会いです。これは私の受け持ちのEちゃんが、自分の家の前で撮った写真ですが (Fig. 13)、自分というものがこの家に住んでいて、これが私の家だよといいます。彼女の家の前の写真に自分を合わせ、これは自分となるのです。



Figure 13

Fig. 14 は E ちゃんの 1 歳のときの制作物で、自分の顔には幾つ目があって、耳があって、こういう顔をしていると。



Figure 14

4 歳のときに、私が顔の写真を半分切って、E ちゃんに顔の半分を描かせて、自分の顔を研究させました。自分はこういう髪の毛の色をして、目がこういうふうだというように。

これは、チューリップをつくることで、自分の手がどのぐらいの大きさがあるかということを知ります。これも私というテーマです (Fig. 15)。

これは、身長をはかって、自分を知ります (Fig. 16)。いろいろなプロジェクトを、先生が、今日はこれをやろうというように子どもに与えます。子どもの興味はほとんど入っていません。大人が決めたからやっているみたいな感じですね。これは結構、日本の従来の幼稚園のやり方ではないでしょうか。



Figure 15



Figure 16

しかし、大人からテーマを与えられるということは、悪いことではないと思います。その理由は、子どもの興味だけに偏ってしまうと、絵を描くことだけが好きな子どもだったら絵だけ描いて、外に出て遊ばないということがあります。そうすると、絵についてはたくさん発達しますが、ほかのところは発達しません。例えば、数字に興味を持とうとしない、外に出て遊ばない、はさみを使わないなど。だから、はさみを使わせる機会、数字に興味を持たせる機会などをつくることは、全く悪いわけではないと思います。

次に、これも私の就学前学校の例ですが、②の保育者が立てた計画から子どもたちと一緒につくっていくものです。このときのテーマは跡、スウェーデン語でスポール (spår) と言います。活動の最後に、テーマの跡について、何の跡なんだろうと子どもに投げかけて、子どもに話してもらいます。例えば、足跡でもいいですし、自分が何かをやった跡でもいいですし、自分の成長の跡でもいいでしょう。

これは動物の足跡はどんな形をしているんだろうとか、自分たちの足跡や手の跡はどうなっているんだろうとかを調べました (Fig. 17)。

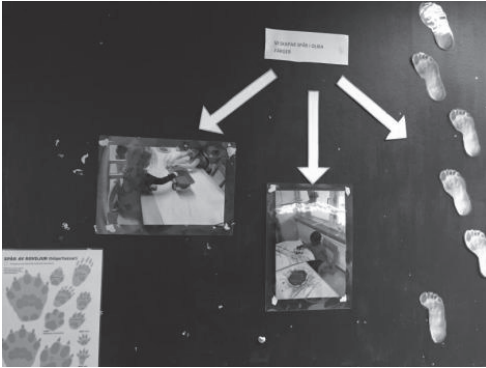


Figure 17

これは、自分たちがつくったブロックの跡はどのようなになっているか、テープを張った跡に色を塗って、テープを剥がすとどんな跡が残るか調べました (Fig. 18)。このように、テーマである様々な跡に取り組みます。これは、子どもが普段やっていることに、これも1つの跡なんだよと保育者が教えてあげる、言い換えると、子どもの普段の生活と跡とを結び付けてき、保育者と子どもと一緒につくっていきます。



Figure 18

これは、雪のところにEちゃんのEを書いた跡です (Fig. 19)。

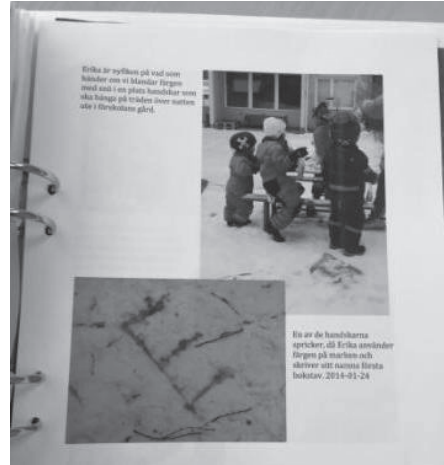


Figure 19

これは、車のおもちゃに絵の具をつけて走らせるとどんな跡が残るか調べたものです。それも跡のテーマの一部としてやりました (Fig. 20)。



Figure 20

これは、保育者が自然科学というテーマを与えました。そして、子どもたちと一緒に森に行きます。スウェーデンの森にはブルーベリーやラズベリーが咲いています。鳥や木の葉など、森で見つけたものを保育者と一緒に調べて、壁に思い出を残していくという共同作業をしています。また、落ちていた葉っぱで制作もします (Fig. 21)。



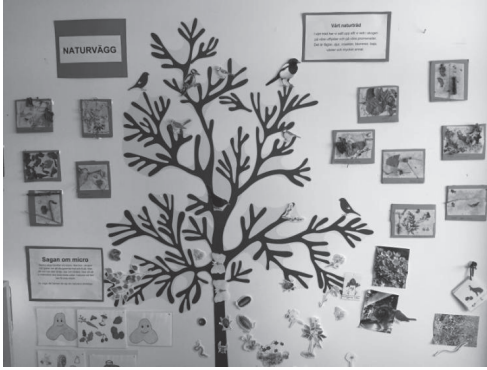


Figure 21

次に二番目の例に当たるアンナの就学前学校での例です。おとぎ話の世界というテーマの活動です。これはどういうものかという、毎週くじ引きをして、くじに当たった一人の子どもに自分のお気に入りの本を持ってきてもらうように言います。家に帰ってから、自分の親と一緒に自分の好きな本について話し合い、選びます。そして、その本を持ってきてもらいます。

保育者は子どもが持ってきた本をみんなの前で読み聞かせます（Fig. 22）。読み終わった後で、どうしてこの本を選んだか、どこに興味を惹かれたかを話し合い、わからない言葉など疑問を出し合います。これもテーマの一貫としてやります。



Figure 22

例えば、この子どもの場合は、『レナートの表』という表をつくるのが大好きなネズミの話の本を持ってきました。お話を聞いた後で、本の中に出てきた表を真似て作ったり、自分でオリジナルの表を作ったりしているドキュメンテーションです（Fig. 23）。教育カリキュラムの中に達成すべきポイントが挙げられていますが、その一つに、就学前学校では、子どもに文字への興味を持たせ、理解させることが求められています。よって、子どもから文字を書きたいと思うような、あるいは文字がコミュニケーションの道具であることを理解するような経験が求められます。これは、小学校1年生に上がるまでに自分の名前を書けるようにすることではなく、就学前学校が終わるまでに、文字が必要なのはコミュニケーションの一環であるからだという根本的な理解を教えるためです。



Figure 23

それから、就学前学校で、絵や写真などの多く

のメディアを使いこなし理解できるように促すことも求められています。

家庭で、子どもがタブレット端末のゲームなどを行っているので、就学前学校ではゲームはさせないようにしてほしいという保護者が多くいますが、実生活では、携帯電話やコンピューターは今や生活の一部になっています。だから、社会で必要な技術を就学前学校から経験させるという考えがメディアに対してあります。

今日の午前中と午後に日本の保育園を見学させていただいたのですが、日本の子どもたちはタブレットなどのIT機器にあまり触れていないと感じました。スウェーデンでは子どもにタブレットを渡して、子どもが自由に使っています。先生は、必ず1人1台小型のタブレットを持っていて、そこに全部の教育ドキュメンテーションを保存しています。



Figure 24

さて、今度はお話カーペットというテーマの活

動を紹介します。これは、子どもに起承転結という文章構成について教えるために、図を使って、お話がどういう構成になっているか話し合わせ、自分たちでオリジナルの話をつくらせます (Fig. 24)。

この取り組みによって、絵を描く子ども、創造力を発達させる子ども、文字に興味を持つ子どもが出てきます。

Fig. 25 は、どうやって本を作っているのかを教えています。例えば、字が書けない子どもには新聞を切り抜いて貼るだけでもいいことを教えたり、保育者と一緒にパソコンで文章を作ったりすることを教えます。



Figure 25

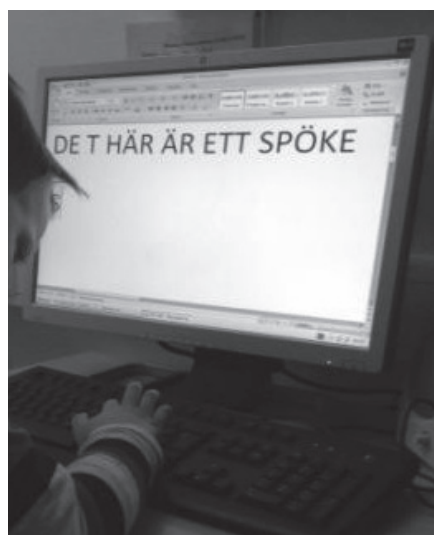


Figure 26

この子どもは (Fig. 26)、スウェーデン語で「Det

här är ett spöke」と書いています。意味は「ここに1人のお化けがいます」です。保育者と一緒にパソコンで文章をつくった後、文章をプリントアウトします。保育者はプリンターの使い方も教えます。このような機器や道具は、子どもが好きなときに使えるようになっています（Fig. 27）。



Figure 27

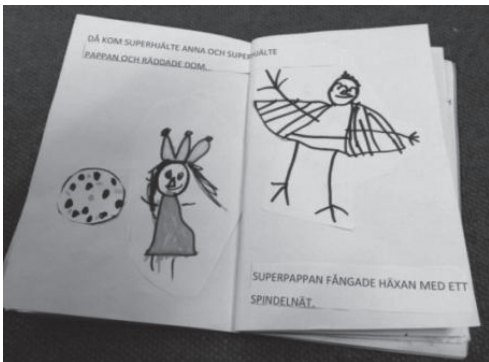


Figure 28

現在の社会にある技術が子どもが使いこなせるようにするということが教育カリキュラムの中に

達成ポイントとして挙げられています。これは、大人が実生活の中でコンピューターや携帯を使っているならば、同じように子どもも使えるようにすべきであり、就学前学校だけ社会から隔離するのはおかしいという考え方です。子どもにも知る権利があるという考え方ですね。

本が出来上がったら、お話ををする場所を作り、子ども達が発表する機会をつくります（Fig. 28）。お互いに、できあがった本を読み合って発表する機会をつくっています。

この活動での大切なポイントは、本をつくった後に、スウェーデン語で言う Utvärdering を行います。意味は評価のことです。どのようにして本を作ったか、何がうまくいったのか、この次作るとしたらどのように作ればよかったかなど、活動を振り返ります。このような評価を子どもと一緒にしますし、保育者同士でも、プロジェクトを振り返ります。次のプロジェクトに活かすために、子どもの意見を聞いて、教育ドキュメンテーションを書いて、また次回に発展させます。

最後に、③子どもの興味からプロジェクトを立てるものについて、メディアの就学前学校の例を紹介します。

Fig. 29 は、子どもが毎日見ていた建物が変わっていく様子を一緒に記録したテーマ活動です。たまたまどこかへ行ったときに、何ができるんだろうと子どもがとても興味を持ったらしいのです。最初は何をつくっているのかわからなくて、何ができるんだろうと子どもと保育者が一緒に想像し、毎週ここに行きました。建物ができていく過程と、そのときの子どものコメントを書いて、建物というテーマで活動しました。建物が完成するまでずっとフォローしたそうです。スウェーデンは残業をしないので、大工さんの仕事はすごくゆっくりすすみます。夏は4、5週間休みをとるので、1軒の家が建つまでに1年以上かかります。だから、このテーマは1年くらいかけて終了したそうです。





Figure 29

Fig. 30 は、もう一つの、③子どもの興味からプロジェクトの例です。これは私の就学前学校での例です。子どもの会話からテーマ活動を始めました。図書館で見つけた本から始まったドラゴンのテーマ活動です。このときのグループの子どもは何故かドラゴンにとっても興味を持ち、図書館に行ったときにドラゴンの本ばかり借りていました。

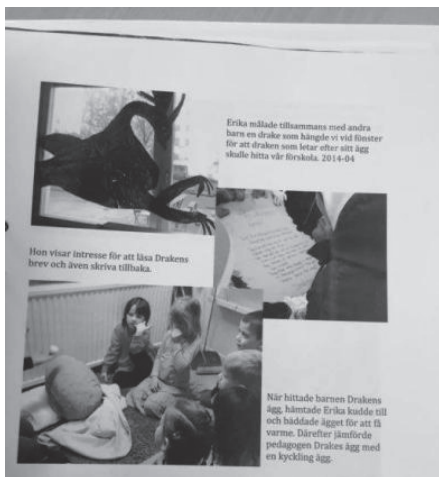


Figure 30

このことに便乗して、保育者が書いたドラゴンからの手紙をトイレットペーパーの筒の中に入れて子どもに渡しました。その手紙には、「私はドラゴンだ。手紙を書いてくれ」と書いてあります。今度は、子どもたちにドラゴンへ返事を書かせました。子どもの手紙の中に、「赤ちゃんがいるの?」という質問があったので、再びドラゴンから「いるよ」という返事を出しました。

子どもに赤ちゃんがいると返事を出したので、保育者はドラゴンの卵をつくり、予め森に卵を隠しておきました。そして、「今日は森に行こう」と言って、子どもにドラゴンの卵を見つけさせました。それで、また子どもはドラゴンに手紙を書きます。すると、文字に興味がなかった子どもも手紙を書くようになりました。

## 5. 子ども達のファイル (Barnens pärmar)



今日、日本の保育園を見学したときに気がつきましたが、日本の保育園では、今日一日、何を食べて、どのくらい寝て、何をしたかという1日の日記みたいな連絡帳が多くありました。スウェーデンではこのような連絡帳は一切ありません。そのかわりに、子どもたちの1歳半ぐらいから5歳（早生まれの子は6歳）までの活動（生活）の様子を1つのファイルにして、卒園のときに渡します（Fig. 31）。ファイルの目的は思い出の写真アルバムとしてではなく、子どもたちの成長を見直すために使う道具として使うためです。





Figure 31

例えば、Eちゃんはファイルを見て、「私がちっちゃかったベビーのときは、これが自分の顔だと思っていた」ってよく言います。ファイルは子どもが自分で見ることができる場所に置いておきます (Fig. 32)。



Figure 32

ファイルは、まず、子どもの成長を目に見えるものにします。子どもが、ファイルを見返したときに、「私がちっちゃかったときはこうだったけど、今はこれができて、今度はもっと何ができるかな。これをしたらもっと上手にできるんじゃないかな」と、成長した自分を知り、そして、子どもが次のステップ（目標）を知ることができます。

このように、ファイルは子どもに成長を促すためのものでもあります。

それから、ファイルは就学前学校がどのように子どもの成長を促す活動をしているか保護者や他の同僚の保育者の目に見えるようにするためにも使います。

このように、スウェーデンの就学前学校で使用しているファイルは、日本の保育園での連絡帳とは全く異なった意味があります。

私が勤めていたインスピーラという就学前学校株式会社はスウェーデンでも大きい就学前学校株式会社で、全ての分校に共通したファイルのひな形をつくっています。ファイルには、次の7つの項目を入れます。①自分と自分の友達との関係 (Jag och mina relationer)、自分が1歳のときにこんなことで遊んでいたけど、5歳になったらどんな友達と遊んでいたか。②自分の興味 (Mina intressen)、どんなことに興味があったか、興味の変遷。③自分の発見 (Mina upptäckter)、1歳のときの発見と5歳のときの発見は違うかなど。④自分の言葉とコミュニケーションとの出会い (Mina språkliga och kommunikativa upptäckter)、初めて言った言葉、5歳ぐらいのときに自分で書き始められた言葉など。⑤自分の算数との出会い (Mina matematiska upptäckter)、⑥自分の科学、化学、物理、生物との出会い (Mina naturvetenskapliga upptäckter)、⑦自画像 (Mina självporträtt)、自分の顔はどんな顔か、自分との出会い。最初は点でしか描けなかったけど、やがて丸が描けるようになり、身体が描けるようになってきたなど。

このように現在はファイル（バインダー）を使用していますが、私たちの予想では、将来、このバインダーが消えるのではないかと考えています。その理由というのは、IT化です。例えば、タブレットなどでプロジェクト活動をすぐブログやフェイスブックで出したりとか、ユニクロン、Fappen などというアプリケーションを使ったりして、保護者にその日あったことを個人的またはグループへ向かって発信できるようになってきています。このように、現在は紙上だけをドキュメ

ンテーションと呼ばず、IT を使用しているところもあります。将来的にはそのような就学前学校が増えていくのではないかと思います。

Q. ファイルには子どもの作品そのものは入っていますか。それとも写真に撮ったものが入っていますか。

A. 作品そのものも入っています。子どもがどうしてもファイルに入れたいというときは入れますが、作品そのものを入れるとすぐファイルが一杯になってしまうので、多くは写真に撮ったものが入っています。作品はほとんど持って帰ります。

## 6. 障がいのある子と就学前学校におけるかわり (Arbetet med barn som behöver skärskilt stöd)

補足ですが、障がいがある子どもと就学前学校とのかわりについてお話しします。

スウェーデンにはコミュニティがあります。コミュニティとは日本ではおそらく区に当たると思います。教育カリキュラムが1998年にできたとき、国の管轄だったシステムがコミュニティに移りコミュニティが全て責任を持って就学前学校の内容、監査、お金など全て責任を持つようになりました。そのため、コミュニティによってお金の使い方、考え方が異なります。コミュニティによって異なりますが、加配保育者が自閉症、ADHD、ダウン症などの子どもにつきます。そして加配保育者が、障がいのある子どもの興味、テンポ、知識、必要性によって、できるところまで他の児童と同じプロジェクト活動に参加できるようにします。逆に就学前教師が障がいを持った子と接している間に加配保育者が他の子どもを見ているなどというパターンもあります。また、障がいのある子どもとドキュメンテーションを使って個人的に交流をします。

先程のドラゴンプロジェクトの場合、障がいの

ある子どもは加配保育者と一緒に図書館へ行きますが、図書館ではできる限り他の子どもたちと一緒にかかります。円陣を組むときに座ってられない場合は、加配保育者と一緒に離れたところで話を聞いたり、または他のことをしたりして過ごします。

現在 (2015 年 12 月) 私はコミュニティ管轄の就学前学校に転職しダウン症の子の加配かつ、就学前学校教師としてグループリーダーとして、教育ドキュメンテーションを同僚の保育者に知識を広めるための仕事をしています。この夏の講演のとき説明したとおり、やはり教育ドキュメンテーションを使つての活動は困難を極めています。就学前学校教師が不足しており教育ドキュメンテーションを浸透しにくい環境にいます。準保育士や保育に関する教育を受けていない者はやはり教育ドキュメンテーションをどのように使っていくかわからず、また重要さも理解できずモチベーションなども低いことから、教育ドキュメンテーションを使用したくないという風潮が保育者のグループに見られます。コミュニティや就学前学校も教育ドキュメンテーション教育を随時与えており教育ドキュメンテーションを使っていかなくはいけなくなるような環境づくりを上からも作っていますが浸透はまだまだといったところでしょうか。

### 〈講演への協力・資料提供〉

アンナ・サロネン (Anna Salonen)

(ピュッスリンゲン 就学前学校・学校 (株) リッ  
ダルボリエン就学前学校)

ミディア・オウディ・ファード (Midia Oudi Fard)

(ピアースバッケン就学前学校)

付記：本研究は科学研究費 (2012～2015 年度基盤研究 (C) 課題番号 2453104 山本理絵研究代表) による研究の一環である。